

武蔵野日曜集会

神殿とは何か

――ヨハネ伝第2章12～25節――

1984年2月19日（武蔵野）

小池辰雄

祭司宗教に対するプロテスト わが父の家 魂の叩き出し わが全存在を圧倒するもの 活ける霊的神殿 聖霊の宮 動的な幕屋 無教会の観念化 『エン・クリスト』を続けてください 羔の怒

【ヨハネ2・12～25】

¹²この後イエス及びその母・兄弟・弟子たちカペナウムに下りて、そこに数日留りたり。

¹³斯^{かく}てユダヤ人の過越^{すぎこし}の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給う。

¹⁴宮の内に牛・羊・鳩を売るもの、両替する者の坐するを見て、¹⁵繩を鞭^{むち}につくり、羊をもみな宮より逐い出し、両替する者の金を散し、その台を倒し、¹⁶鳩をうる者に言い給う『これらの物を此処より取り去れ、わが父の家を商売^{あきなひ}の家とすな』¹⁷弟子たち『なんじの家をおもう熱心われを食^くわん』と録されたるを憶い出せり。¹⁸ここにユダヤ人こたえてイエスに言う『なんじ此等の事をなすからには、我らに何の徴を示すか』¹⁹答えて言い給う『なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起^{おこ}さん』²⁰ユダヤ人いう『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは三日のうち之を起すか』²¹これはイエス己が体^{からだ}の宮をさして言い給えるなり。²²然れば死人の中より甦^{よみが}えり給いし^{のち}、弟子たち斯く言い給いしことを憶い出して聖書とイエスの言い給いし言とを信じたり。

²³過越のまつりの間、イエス、エルサレムに在^{いま}すほどに、多くの人々その為し給える徴を見て御名を信じたり。²⁴然れどイエス己を彼らに任せ給わざりき。それは凡ての人を知り、²⁵また人の衷^{うち}にある事を知りたまえば、人に就きて証する者を要せざる故なり。

●祭司宗教に対するプロテスト

¹²この後イエス及びその母・兄弟・弟子たちカペナウムに下りて、そこに数日留りたり。



「カペナウム」はガリラヤ伝道の根拠地で、ガリラヤの北の方です。今でも石の柱が遺っている。マタイ伝4章に似たようなことが出てます。「兄弟」というのは、ヨセフとマリヤとの間の肉の子です。なかには、ヨセフは前に別に女がいてその子だろうなんて言う学者もいるけれども、そんなのはあまり感心しない。

13 ^{かく}斯てユダヤ人の過越^{すぎこし}の祭ちかづきたれば、

「過越の祭」というのは大変なお祭です。出エジプトのあの有名な「過越」です。あれは贖罪の予表だからね。門の柱に血が塗ってあれば、その前を過ぎ越して行く。そうでないものは、その家に入って初子^{ついでこ}を殺してしまうという。あの頃にそういうことがあった。イスラエルの初子は守られた。そうすると逆に今度は、ヘロデが2歳以下の子供を全部殺したでしょ。マリヤとヨセフはエジプトへ逃げて行った。過越というのはイスラエルの救い、エジプト人がやつつけられるという歴史的なところからきている。旧約の出エジプト記を見てください。

イエス、エルサレムに上り給う。

この祭には方々からみんなやってきますから。

14 宮の内に牛・羊・鴿を売るもの、両替する者の坐するを見て、

「宮」はもちろん神殿のことですが、庭がいくつも段階になっていて、一番上の、祭司が入る庭と、イスラエルの男子が入る庭、婦人が入る庭、その一番下が異邦人が入る庭と、そういうふうに区別してある。両替をしたり、こんなものを売っているのはおそらく一番下の庭でしょう。上の方ではこういうことはできないと思いますが。どれにしても、神殿の中でけしからんというわけです。この「牛・羊・鴿」はもちろん犠牲にするためのものです。「両替」は、神殿に献金するときにはローマのお金をユダヤのお金にしなければいけない。ローマの半シケルがユダヤの2ドラクマという計算だそうです。

15 繩を鞭^{むち}につくり、羊をもみな宮より逐い出し、両替する者の金を散し、その台を倒し、

見たところ、非常に乱暴な仕打ちをなさった。しかし、宮の中の権威者は祭司ですから、祭司の許しを得ないでいろんなことはできないわけです。日本の封建時代と同じです。だから、これはもうハッキリとキリストの当時の祭司宗教に対するプロテストです。

「神かマンモン(富)か。二主に仕えることはできない」

と。キリストは、この神聖な神殿を商売の金儲けの所にするのはとんでもないはなしだと、行動にいきなり出たわけだ。ヨハネ伝では伝道の始めにこれをやられましたが――これは全部の福音書に出ている――他の福音書では、これはむしろ伝道の終りに、エルサレムにいよいよ入られて、最後のところできつたわけです。マタイ伝21章、マルコ伝11章、ルカ伝19章。みな十字架にかかる前ですよ。もう十字架を覚悟のこと。ヨハネ伝のはちよつと場所を間違えたのではないかと言う人もあるけれども、そうじゃなくて、おそらくこれ



は第一回と第二回と、始めと終りに二度あったのではないかと、そういうように考える人があるわけです。

●わが父の家

キリストの言葉に気をつけなければならない。

16 鴿をうる者に言い給う『これらの物を此処より取り去れ、わが父の家をあきない商売

の家とすな』

「わが父の家」という。12歳のときにも、

「わが父の家に居て、なぜ悪いか」

というようなことを言われた。あれと同じように「わが父の家」と言われた。キリストは、「神」とはなかなか仰らないで、「父」と言っている。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまひし」

とあるが、あれは詩篇の言葉だからね。

神道でいうと、「降霊」といって、神さまの霊を降すことをやる。それからまた、霊を上へ昇らせる。神さまが神殿の中に霊をもつて来たりたもう。それはそういう意識はあつたでしょうね、神殿そのものは建物に過ぎないんだけど。建物だけでも、これを「神殿」の神にするところの実は神の霊です。そういう意味において、神殿をして神殿たらしめるものは神の霊なんです。神の霊が内在したところ、これが「わが父の家」です。なにも建物だけではない。野原であろうとどこであろうと、みんなキリストには「わが父の家、わが父の庭」なんです。内村先生がこの大自然を教会のように言われている有名な文句がありますけれども、「正にそのとおりです。」

「大地は、緑の野は神殿の床である。大空は屋根である」

なんて言われた。いわゆる神殿宗教や祭司宗教は、それが弊害になつているからダメだと。それと同じような精神だったのが内村先生で、「無教会」なんてことも言い出したわけです。形はあつていいんですよ。ただ形にとらわれるからいけない。形を内側から本当に活かす神殿にするものが、本当に神をそこで拝するということ。日本ではお寺さんがたくさんあるし、ヨーロッパへ行けば立派な教会堂がある。よくもまああんな大きなものを建てたかと思うね、正直。そして、その中でパイプオルガンだ、やれなんだかんだと、非常に宗教的な雰囲気はつくる。中に入ると、なんとなく神々しい感じもするわけだ。まあ人間にはそういうところがあるとみえる。お寺でもお宮でもみんなさうだ、東西古今、どこへ行つても。ただ問題はいつも、本当に神の霊を、キリストの霊をそこで本当に拝しているかということです。

我々はキリストの絵をなにも拝んではない。これはひとつの象徴ですから。

「いや、そんなものは偶像だ」



なんて言っただけで、これをぶちこわしたりする。宗教改革のときに、極端なご連中が教会荒らしをやったわけです。マルチン・ルターは

「そういうことをしてはいかん」

と言った。神殿はあつてもなくてもいい。あれば、それを本当の神殿にする。なければ、いたる所を神殿にする。これが本当の礼拝の仕方です。だから、神殿とは何か。あるひとつの固まったものではない。それも神殿にもできるし、我々はこの部屋を神殿にしているわけだ。それは内側で本当にキリストの霊と御言によって導かれているからというわけです。

●魂の叩き出し

「宮清め」というのは、ただ彼らを咎で追い出したから、それで清めたということではない。キリストはこれを語って、「出て行け」と言われようが、咎でなさろうが、そのやり方はどれだっていい。問題は、彼らをいくら追い出したって清まらないんだよ、気持が相変わらずなら。いつかキリストがいなるときはまたやってやろうなんて思う。それでは清めにならない。

牛や羊や鳩を売る者を叩き出す。ということ実は、彼らの魂をその商売根性から叩き出さなくてはいいかん。魂の叩き出しなんだ、本当は。そのことは受けとらないですよ。

「乱暴なことをするやつだな、仕方がない、まあ出て行け」

くらいなところだね。そうでなくて、

「本当に私は間違っていた」

と言っただけで平伏せば、本当の清めになるけれども。これは本当の清めは受けてやしないですよ、おそらく。だから、私は今日は、「宮清め」という言葉は使わなかった。「神殿とは何か」という問題にした。

我欲の根性の魂を、その心を叩き出す。そういうことです、キリストの「宮清め」というのは。なにも牛や羊や鳩ではない。

17弟子たち『なんじの家をおもう熱心われを食わん』と録されたるを憶い出

せり。

弟子たちは、「なんじの家をおもう熱心われを食わん」という詩篇の言葉を思い出して、「あこれだなあ、キリストのなさっているのは」と思った。「なんじの家」というのは神殿のこと。詩篇69篇にある。7節から、

「⁷我はなんじのために謗をおい恥はわが面をおおいたればなり。⁸われわが

兄弟には旅人のごとく、わが母の子には外人のごとくなれり。⁹そはなんじの家をおもう熱心われをくらひ汝をそしるもの謗われにおよべり。」（詩篇69・

7～9）



9節の、

「なんじの家をおもう熱心がわれをくらった」

というのはおもしろい言い方ですね。この「熱心」というのは上からくるんだ。自分の主観的な熱心ではない。なんじを思う熱心が、そういつたもの凄い情熱が、天来の情熱が、私を食い尽くすように――熱心をくらったのではない、熱心が我をくらったんだ――熱心に圧倒されている。

「エホバの熱心これをなし給う」

ということです。その「熱心」なんです。「なんじの家を思う熱心」は神さまの熱心であつて、それが我をくらったということ。

「弥陀の本願の劫力」^{じゆうりき}

という言葉があるとおおり、こういう上からくるものを本当に受けとることが祈りの一番大事なことなんです。そうするともう、主観的では全然ないですから。

●わが全存在を圧倒するもの

私は今度の『エン・クリスト』誌17号の6頁の上段に次のように書いた。

「文学作品を景観に譬えるところならば、ゲーテの『ファウスト』、ミルトンの『楽園喪失』、ダンテの『神曲』、藤井武の『羔の婚姻』は

私はいかような第一級のものを非常に読んでいたから。

いづれも壮大、雄渾、壮美なるもの、私の魂を感動させて余りある景観で、生涯をかけて愛読するであろう。しかし唯一の例外者がある。それはわが全存在を圧倒するものである。

傍点が打つてあるでしょ。

曰く、聖書！

聖書は、こちらが感動するのではなくて、向こうから圧倒する。聖書が持っているところの熱心が私を食うんだ。あなた方は、聖書をそのような書として、聖書に圧倒されなくては。「聖書研究会」なんてものはダメだ。何も私は研究会をするなど言っているのではないけれども。至るところに、ことに無教会は

「研究会、研究会。ギリシア語、ヘブライ語」

とやっている。日本語でいいよ。逆に、ギリシア語やヘブライ語が本当に解るかと言いたい。それは私だつてかじりますよ、ギリシア語やヘブライ語を。無教会では私が一番先にヘブライ語をやったんだから。塚本先生にヘブライ語のクラスをもたされて3年間教えた。けれども、私はヘブライ語になにもこだわってはいませんよ。

聖書は全存在を圧倒するものである――こちらが感動するのではなくて――圧倒する。驚嘆驚倒せしめられる。受け身です。



ところでこの聖書に圧倒されるようになった峠があった。それは大阿蘇の深山幽谷にある瀧見荘に於ける集会であった。一九五〇年の晩秋十一月三日から五日にかけての深い白熱的な聖書集会であった。手島郁朗氏と私が交互に聖書を講じ、私はそのときにイザヤ書をやった。

且つ祈禱会をした。そのときに私は私としての未曾有の体験をした。即ちいきなり天界から聖霊の降臨にあづかった。異言が迸った。全身がみ霊に震撼した。これこそが聖霊のバプテスマであった。聖書のヴェールがとれた。聖書の言の次元がからだで感得されてきた。キリストが「わが言は霊なり生命なり」と言い給っていることがからだで受けとられ出した。意味ではない、現実である。解釈ではない、力の体受である。見られる文字ではない、聞こえてくるひびきである。研究して解るの解らないのではない、身読して圧倒されること、降参することである。かくて私はハッキリと預言者や特に使徒たちの次元に入れられた。

全くそのとおりです。だから、無教会とはサヨナラした。無教会信仰は今でも相変わらずそうなんだ。お気の毒さまというわけだ。全くね、本当にぶっ倒れてないもの。教会も大体そうでしょうね。誰がどうだこうだなんて、そんなことではない。この6頁の下段は烈々たる文字ですよ。あなた方はこういうのを読んで、ビリビリこなくては。私は考えて書いてやしない。迸って書いてあるから。これが「なんじの家を思う熱心」で、天来の熱心が私をくらい、私をぶっ飛ばした。

キリストのみ霊を受けたからである。これは私の人生の決定的な峠となった。私に対して一線をひいた無教会グループに別れを告げざるを得なくなった。手島兄らしい道をひたむきに走った。「原始福音」の大集団がおのずから展開している。人間のいとなみには夫々の長所と欠点がある。大切なのは、個人にせよ、どんなグループにせよ、教派にせよ、集団にせよ、つねに新たにおのれを乗り越え、おのれを蹴破って前進することだけである。

「自分を蹴破って前進する」なんていう、こういう言葉は、もう私は本当にその点で自分がないものね。だから、力が来てしようがないし、楽しくてしようがない。本当だよ、これは。そうでなかったら、私には無限の力は来ないんです、そういう魂でないならば。

ひとがどうだこうだではない。私はそんなことにもう関心も興味もない。何より自分が問題にならない。こんな者を問題にしても始まらないからである。第三の峠を迎えたらそういうことになった。」(『エン・クリスト』第17号の「八十路の峠を迎えて」より。

1984年2月、曠野の愛社刊)

「第三の峠」とは、『無の神学』(『小池辰雄著作集』第3巻、1982年刊)が告白しているところですよ。だから、私の『無の神学』なんてものは、普通の人がいくら書評を書こうとしたって書けないわけだ。絶対に書けない。私は自分を何か言っているのではないですよ。



第一流の坊さんとか使徒たちの次元はそういう次元ですよということを叫んでいるわけです。そして、それは万人が入れるんです。誰でもが入れる次元なんです。そうするともの凄い。

●活ける霊的神殿

18 ここにユダヤ人^{ひと}こたえてイエスに言う『なんじ此等の事をなすからには、

我らに何の徴を示すか』

ヨハネ伝で「ユダヤ人」と言うときは、ユダヤ教に凝りかたまつた連中ということなんです。ただ人種を言っているのではない。

「ユダヤ人は徴を求める」

とパウロが言っているとおおり、何か御利益的な徴を求めている。日本の民間信仰もみんなこの徴、御利益だね。御利益宗教だ。ときどきテレビに出てくるけれども、あれはみんな御利益宗教だ。まあ、「利益」という言葉は悪い意味ではなくて使う場合もありますよ、仏教では。

私は、言葉の深い意味では「徴の宗教」なんて言いますよ。「徴」「シンボル」なんだ。シンボリズムス、象徴主義だ。主義といつたらおかしけれども。その徴が大現する。こんな字は今日初めて書く。大きく現する。徴が大現するときが新天新地なんです。黙示録が示している世界です。黙示録も全部、あれは徴ですよ。ただ最後に、黙示録に語られているとおおりになるかという、そうではない。あれは暗号なんだ。暗号であり徴である。最後の新天新地がどうであるか知らん。

キリストは神さまの徴です。

「われを見し者は父を見しなり」

「われは父の徴なり。われは父の出店なり」

というわけだ。商売じゃないよ。「何の徴を示すか」と聞いたら、キリストがエライことを言い出した。

19 答えて言い給う『なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起さん』

お前たちはこの宮をぶつ壊したらいいだろうと。大変だよ、ヘロデ大王が何十年もかかった宮だから。これは多分、紀元前20年くらいから始まっている。50何年かかっている。キリストが30幾つときだからね。ところが、

「壊せるなら壊してみろ。そうしたら、何十年もかかっているこの神殿を私は三日で建てる」

と。全然、次元のちがったことを言っている。素晴らしいね、このキリストというひとは。素晴らしいどころではない。言葉では言えない。キリストは活ける神殿だから。神殿とは何ぞや、キリストなりと。

「神殿とは何ぞや」



という問に対しては、

「キリストなり」

という答が一番端的な答なんです。「宮清め」の何だのということではない。「宮清め」なんという言葉がもう熟しているから、解釈がみんな決まっちゃってしまっている。そんな読み方ではいかんと言うんだよ、私は。キリストの最後の言葉が一番大事な言葉です。

「なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起こさん」

と。十字架にかかって三日目に甦る。この復活のキリストが神殿なんだよな。活ける霊、神殿だ。活ける霊的、神殿です。それが本当の徴だという。

「お前たちの求めているような徴とはちがうんだ、徴のケタが」

と。こういうわけです。もう実に痛快な言葉だ。

「まあなんて立派な神殿だ」

と驚嘆していたら、

「お前たち、そんなことで驚いているか」

というようなことが別なところに書いてある。

私はヨーロッパに行つて大きな教会堂を見て、まあ素晴らしいなとは思ってけれども、このキリストの言葉にみると、おやおやということになる。神殿巡りなんかしたつて、宮巡りなんかしてもダメなんだ。ところが、イスラエルの宗教では、「宮詣」をやっている。ここに言っているのは第三神殿だ。ダビデ・ソロモンが建てた第一神殿がアッシリア・バビロニアに焼かれて壊れた。それからバビロニア捕囚のあとで、紀元前515年に建てた。それが第二神殿です。それがまたダメになつて第三神殿になった。これがまた紀元70年にローマにやつつけられて亡びてしまう。

●聖霊の宮

キリストという活ける神殿は永遠の神殿です。黙示録に書いてあるとおり、

「そこにはもはや宮がなかった。神と羔がその宮であった。日月の照らすを

要せず、キリストはその光であった」

と書いてある。大変なことですよ、ああいう暗号的な言葉は。

福音書を読んで、キリストを瞑想して、キリストの中に入つてごらん下さいよ。あなた方が宙に浮いてしまうぞ。それくらいの実現に入らなかつたらつまらないよな。そうしたら、

「なんだかしらないけれども、どこか体の調子が悪かつたのが全部ぬけてしまいました」

ということになる。本当にそうですよ、祈りの世界でそれだけの境地に入つたら。

昨日も私はちょっと重大な病気の人を見舞いに行った。普段は元気な人です。元気はあるんだけど、喉頭ガンだから声が出ない。奥さんがつきつきりでした。



「小池先生は昔とほとんど変わらないですね。どういうご健康法ですか」と聞くから、

「私はなにも健康法なんかはない。ただコマネズミみたいに動いている。本当のことを言うと、私は上から力がくるんですよ」

を言うと、私はその病人に按手して祈ってきた。「先生、また来てください」「はい、また来ますよ」と。まあ、そういうわけです。

私たちはキリストの証者として、あなた方はみんなできるんですよ。だから、この自己がすつ飛んでいる世界に入りなさいということです。十字架はそれを私に与えてくれる――「十字架は罪の贖い」という命題を信じたって何になるか――即無限無量の世界を与えてくれるんだ。

「なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起こさん」

と。キリストは活ける神殿であった。あなたがたは、「そうですか」ではない。今度は、パウロが言っているとおおり、

「お前たちは聖霊の宮である」

と言う。パウロの手紙を見ましようか。コリント前書3章、ここに畳みかけて書いてある。

「⁹我らは神と共に働く者なり。汝らは神の島なり、また神の建築物なり。…

…¹⁶汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御霊なんじらの中に住み給うを。

御霊が住みたもうがゆえに神の宮であるというわけですね。

¹⁷人もし神の宮を毀たば神かれを毀ち給わん。それ神の宮は聖なり、汝らも

亦かくの如し。」(コリント前3:9:17)

我は聖霊の宮であるという。キリストを受けとっている者は、信受している者は、我自身がキリストと同じく神殿であります。「偶像の宮」なんていう言葉もあるな、コリント前書に。そんな偶像の宮ではないんだ。

エペソ書2章にもある。

「²⁰汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト・イエ

ス自らその隅の首石たり。²¹おのおのの建造物、かれに在りて建て合せられ、

いや増しに聖なる宮、主のうちに成るなり。²²汝等もキリストに在りて共に

建てられ、御霊によりて神の御住となるなり。」(エペソ2:20-22)

これが聖霊によって、「神の宮」というわけだ。

● 動的な幕屋

我々自身がまた「幕屋」であるわけです。個人も幕屋なんです。個体も幕屋、こういった群も幕屋。イスラエルでは、これが

「神との出会いの幕屋」



とって、旅するところの神殿なんです。だから、本当は幕屋が一番、神殿の原型なんです。出エジプトのあの姿をみると、幕屋を張りながら動いていたでしょ。そこに神がやって来て、神の栄光が現れる。幕屋は動的なんです。本当は神殿は動的で、生きているから。動的な姿です。世界の歴史が旅である。個人の生涯もまた旅である。それで幕屋が張られて行く。

「汝らのうちに幕屋を張りたもう」

と、ヨハネ伝1章のところにも出ていたでしょ。なにか止まっておしまいな、動かないよいうなものでなくて、動的なんです。ある時は静かにして、ある時は動きだす。それは活ける神殿だから。我々自身が活ける神殿です。そういう意味で、身体も粗末にはできないわけです。そして、霊肉渾然として救いにあずかるわけだ。

「神殿とは何ぞや」とはそういうわけです。キリスト、そして「エン・クリスト」(キリストの中)の我々自身。そういう神殿の集まりが、そういう幕屋の集まりが、また幕屋であるわけです。だから、「召団」という言い方は――藤井先生がそういう言葉を使つたし、私は今でも召団と言っているんだが――本当は「幕屋」と言いたい。けれども、手島さんが「マクヤ」と言つて、あんなにやつちやつたもんだから、混同するから、やめたけれども。我々が本当は本家本元なんだ。私が言い出したんだから。そういうことで、幕屋という内容には大いに親しんでいただきたい。

●無教会の観念化

無教会というのは、「無教会主義」とか何とかになつてしまつて、本当の幕屋的な自覚を持たないから、観念化してしまう。内村先生は観念だなんて、私は言いません。素晴らしき人ですよ、内村先生は。けれども、内村、藤井、塚本という先生方はどうして聖霊のことをもつとハッキリと自覚していただかなかつたか。そこが残された課題だから、手島さんと私がその残された課題を手がけていった。無教会の本当は進展なんだ。

塚本先生が私に言ったんだから。そんなことを言うと、無教会の人たちが大変なことになる。私は塚本先生を訪ねて行ったときに、塚本先生が私にハッキリ仰つた。

「僕の伝道は本当は間違つていたんだよ。」

研究に傾きすぎたということです。

手島君や君のやつていることが本当なんだ。大いにやつてくれたまえ。ただ、ま

ちがえないようにやつてくれ」

と、ハッキリ言われたよ、私に。それを文字にすると、塚本先生も迷惑するから、私は黙つていた。無教会は、

「塚本先生がそんなことを言つたか」

なんていうことになるから。本当に言つたんだ。塚本先生は正直な方だからね。

私がブルンナーと一緒に、教会と無教会に話をするようになった。



「無教会の方では、小池さん、あなたが話してくれ」

というから――教会の方では女の方でしたけれども――銀座の教会で話した。一千人くらい集まってきた。本当にお歴々がやって来たよ。その時、私はハッキリ語ったから、御霊の世界のことを。そうしたら、塚本先生があとから私にお便りくださって、

「未だかつて聞かなかったことを聞いた。素晴らしかった」

と。私はその葉書を持っている。そうなんですよ、先生方は正直だから。

私が早稲田で「無的実存」のことを話した時にも、矢内原先生は楽屋裏で、

「小池君にはかなわないよ」

と言った。正直、それは感ずるんだよね、感ずるものは。だけれども、しょうがない。私は、先生方はみなそれぞれの役割を果たされたから尊敬しています。けれども、あとのやつがいつまでたっても同じようなことをやっているから、なぜ前進しないかと。あなた方も私のあとから大いに前進してくださいよね。

「もう、小池先生は、私は卒業した」

と言って出て行ったやつがあるよ、スエーデンボルグが好きで（笑）。どうなっちゃってしまっているか知らん。なにも悪口を言っているわけじゃない。とにかく、みなそれぞれ役割がありますので、これは大いに全部、縦の関係でも協力であるし、横の関係でも協力で、お互いに助け合って行くだけのはなし。そして、お互いの役割を大いに認めながら、また尊重しながら、助け合いながら進んで行くわけですよ。

●『エン・クリスト』を続けてください

それととにかく、クリストに内住していく。

「エン・クリスト」（われクリストのうちに）

でなかったら、あるいは

「エン・エモイ」（クリストわがうちに）

でもどっちでもいい。『エン・クリスト』というこの雑誌は、私がぶつたおれでも続けてくださいよ。手島さんがたおれたときに、さあ『生命の光』誌をどうしようかと迷った。無教会では先生がたおれると、みんなそれをやめてしまう。それで、幕屋の連中がやって来て、

「先生がたおれてしまったんだが、『生命の光』はもうやめようか、どうしようか。」

無教会ではみなそうだが」

なんて言うから、私は、

「何を言っているか、君たちは。『生命の光』は聖霊の導きによっている雑誌ではないか。手島さんがたおれたって何だ。君たちはバトンタッチして進まないでどうするんだ」

とハッキリ言っちゃった。そしたら、彼らは喜んでしまつて、それで今、『生命の光』はあ



あやつて勇ましくやっているんですよ、本当に。今でも彼らは、

「あの時に小池先生にあのようにハッキリ言われて、本当に感謝でした」

と言うもの。私は私心がないから、本当のことを言うんです。

皆さんはこの福音を受けとつたらば、私がぶつたおれたつて、

「それは行きますよ」

と言つて、『エン・クリスト』を、つ續けてください。その準備に私はこれからだんだん『エン・クリスト』を書かないから。皆さんに書いてもらおうと思う。もう三分の一くらいで御免こうむるよ。今度、京都へ行つたら、ハッキリ言うから。そうしないと、また育たないんだよな、あまり僕に頼っていたのでは。しかし、私の目が黒いあいだは、あなた方は本当に一緒に協力してくださいよ。そして、ぶつたおれたら、あとどうやるかは、ハッキリしている人たちはもう一緒にやっつていけば解るからね。そういうようにして、あなた方を私は信頼しているんです。話はいろいろズレてしまつたけれども、まあしょうがない。

● 羔の怒

20 ユダヤ人いう『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは三日のうち之を起すか』²¹これはイエス己が体の宮をさして言い給えるなり。

もうハッキリ言っている。「宮をさして」というのは「宮について」という字です。

22 然れば死人の中より甦えり給いしものち、弟子たち斯く言い給いしことを憶

い出して聖書とイエスの言い給いし言とを信じたり。

まあやつと解つたわけだ。イザヤ書やエゼキエル書。復活のことは特にエゼキエル書がそうだ。

23 過越のまつりの間、イエス、エルサレムに在すほどに、多くの人々その為

し給える徴を見て御名を信じたり。

何か不思議なことがずいぶん起きたらしい。

24 然れどイエス己を彼らに任せ給わざりき。

危ないからね。

それは凡ての人を知り、²⁵また人の衷にある事を知りたまえば、人に就きて

証する者を要せざる故なり。

イエスは霊眼でもつてちゃんと人が見えている。おのが時が来るまでは——こないだ「おのが時」というのがありましたね——人に任せることはなさらなかった。

キリストはとにかく、両替や商売やつているのを怒つたでしょ。これは「羔の怒」ということです。羔は優しい方なんですけれども、時あつてか怒る。彼らの在り方を怒りは裁くわけです。審判なんです。キリストはいくら怒つても、ひっくり返しても、

「お前たちが本当に悪かつたと悔い改めればいいんだよ」



と――そこまでは仰らないけれども――愛すればこそその怒りです。だから、本当の怒りは愛の別の姿なんです。審判は恩恵の別の姿です。そこに恩恵が隠されている。恩恵が隠されていないような審判や、愛のないような怒りは、それはいかん。

ところが、人間の世界は非常にそれが多い。だから、みんなおかしなことになる。怒ったり、批判したり、人の悪口言ったり、みんな言う人自身がダメになっていく。陰口を言ってみたり。もう私はそんなことは全然、問題にしませんから。

どこまでも神さまは私たちを捨てない。なんとかして救いあげてしまおうとする。そういうキリストの圧倒的な顧みというものに自分を本当に任せたら、そうしたら本当に変化するよ。人間にはいろいろな性格がある。けれども、それが変えられていく。私なんかは生まれつき弱虫の泣き虫なんだけれども、そうでなくなってしまった。むしろ弱さに徹してしまったら、力が上からやってきた。「徹した」と言っても、自分が徹したのではない。徹しせしめられてしまった。人間は、「キャラクター・ネバー・チェンジ」(性格は決して変わらない)という言葉もある。

イザヤ書11章に出ているような、ヘビと幼児が戯れたり、まあエライことを書くね、イザヤは。そういう本当に平和と悦びの世界を彼らはやはり霊において夢見たわけだ。ルーベンスが描いている。神さまの霊が来なかったら、一切のことはどうにもならない。個人にしる社会にしる国家にしる。国家が善くなるなんて、そんなことは考えられない。だから、大きくひっくり返らなければ。特に個人は大きくひっくり返らなければ。そうしたら、「自分分は塵芥のごとく思う」ということになる。パウロと同じです。

「我は自分を塵芥のごとく思う。このキリストを得たるがゆえに」

と。アーメン・ハレルヤですよ。信仰はそこまでこなかつたら、何が信仰かと言いたくないだよな、正直。「私の信仰は」なんて、そんな自分の信仰を大事にしているようなことではダメです。無き者、無者です。

「私はキリストの無者です」

と。そういうことで、本当にキリストの活ける宮、幕屋、活ける幕屋です。そして、楽しい旅を、皆さん、やっていきましょようと、こういうわけです。おしまい。

